

水曜日 5限 ジャパノロジー・ゼミ課題

A1217437 菊池 奈央子

個人と震災

2011年3月11日。全世界の何割の人々がこの日付を気にとめるかは解らないが、「日本」に何らかの帰属意識をもつ人間ならば、必ず「震災の日だ」と答えると断言できるだろう。日本のほぼ全土が揺れ、誰もが不安な夜を過ごし、「絆」「がんばろう」「応援しよう」等々の団結を呼びかける言葉が声高に叫ばれた。

わたしの約22年の人生の中で、日本という枠を最も強く意識したのも震災時だと思う。自衛隊、ボランティア、応援の市役所職員や警官、様々な人々が日本全国から被災したわたしの故郷に集まったし、千羽鶴や手紙もほうぼうから沢山届いた。日本がひとつになったとまでは言わないが、日本という枠や結びつきがあの時とても強くなっていたことは確かであり、ある種の団結感を肌で感じられたことをよく覚えている。

故郷である宮城県石巻市にいた間は「震災とは何だったのか」と疑問に思ったこともなかったが、震災の翌年進学に伴って上京した際、各人の「震災」が決して同質のものではないことに気付いて愕然とした。ある人にとっては漠然とした不安であり、ある人にとっては計画停電であり、ある人にとってはニュースのトピックだった。

あの時日本は震災の何を共有し、何を絆として団結しようとしていたのか。日本人すべてが通過した「共通項」とも言える災害なのに、各人によってその本質は大きく異なる。

何らかのドキュメンタリーを制作する際、情報の選択・編集は避けて通れないが、「悲しみ」「困難」「厳しい現実」等の主題や物語性を追ううちに、削ぎ落とされてしまいがちな小さな声というの、そういった「完成した作品」に向いていないとはいえ、きちんとした情報として残しておくべき資料たりえるのではないか。

未だに震災が終わったとは思えないが、1年ほど前から「ずいぶん遠いものになってしまった」と思うことが増えた。震災時の配給で食べすぎて見たくもないくらい嫌いになった菓子パン(震災前までは大好物だった)を何も考えずに買って食べられるようになったし、帰省するたび新しい建物が増え、ボランティアは撤退していき、堤防もどんどん出来上がり、港には船が戻りつつある。私は阪神淡路大震災の日付を覚えていない。東日本大震災の記憶が遠くなりきってしまう前に、自分の周りの人々にだけでもその人々にとっての震災が何であったのかを尋ねて記録したいと思い、簡単な3つの質問を設定し、回答をまとめることで本ゼミの期末課題としたい。

1. 2011年3月11日の震災が起きた時間、どこで何をしていましたか？(県名なども添えてお答えください)
2. 震災のニュース映像を見てどう感じましたか？
3. 「震災が終わった」と感じたのはいつですか？

1と2は回答者の震災経験について聞くため、3は震災に対する現在の姿勢を問う旨で設

定した。

以下、回答

(1) 20代女性

1. 青森県弘前市の高校で生物の授業を受けていた。
2. 最初に触れたニュースは停電のため自分の携帯で見た NHK の中継で、仙台空港が完全に水没している様子がかかなりショッキングだった。地震の揺れの大きさを伝えるものよりも、津波の被害を映した様子を見てこれまでにない甚大な被害である、と思った。
3. 引き起こされた原発事故などが未だ収束しておらず、まだ終わったとは言えないと思う。

(2) 20代男性

1. 宮城県南三陸町、自宅で地震に遭う（津波被害なし）。
2. 隣の気仙沼や石巻の映像だけが放送され、南三陸の様子がまったく分からないなか、「この町は見捨てられたんじゃないか」と感じた。
3. まだ終わったとは感じていない。

(3) 30代男性

1. 地震が起きた瞬間は宮城県の三陸自動車道奥松島付近にいて、止まった信号などを無視して石巻市大街道付近に向かったら波が来て追われました。
2. 震災から2日後、日赤病院でテレビを見ることができて、これから先復興するのか気が遠くなりました。
3. 自分の中ではすぐ、一か月くらいで終わりました。終わらせたというか。どうあがいてもこの現実の上で生きてくしかないことに腹をくくりました。

(4) 20代女性

1. 宮城県石巻市の高校で部活動をしていた（当時高校2年）。
2. 自宅は津波の被害を受けたが実際に津波を見たわけではなかったため、映像と同じようなものが家を襲ったのだと考えたら、ただただ恐ろしかった。
3. 生活で震災による不便さを感じなくなったとき（例えば、避難所生活ではなくなった、学校が再開した、生活に必要なものが揃い始めた、など）。

(5) 20代女性

1. 高校(宮城県)で授業中でした。調理実習をしてました。
2. ニュースをみたのは、電力が回復してからだったので、他人事というか、思った以上に大変なことになってるぞ、という感じでした。テレビの中で騒がれている中心にいるのに、被災者という実感はなかったです(家族に大きな被害がなかったからだと思いますが)。
3. 終わったと感じた決定的な瞬間はありません。上京等で、いつの間にか意識から消えていきました。宮城出身と言って心配されることもなくなりましたし。でも、帰省した時に公園に並ぶ仮設住宅を見ると終わってないんだなと感じます。

(6) 20代女性

1. 宮城県石巻市。高校で授業中でした。
2. 最初はニュースなどは電気がつかなかったので見れなかったです。ニュースを見ると色々これからのことについて不安になりました。
3. 2年後くらい。両親が家をたてて内陸に引っ越したので。でも、被災した家を取り壊されたのが3年後位だったのでその時にひと段落という感じ。

(7) 20代女性

1. 宮城県石巻市にて、高校の授業を受けていた。
2. 津波の直接的被害を受けた地域の映像は現実のことでないように感じた(当時被災地域に住んでいたが、自分は近親者が亡くなる怪我をする、家屋が全壊する等の取り返しの付かない被害を受けていない)。自分の目で被害を受けた地域を見に行ったときはひたすらに「凄まじいことが起こったのだ」とだけ感じ圧倒された。「あの日、私は。」のような被災者の気持ちにフォーカスしたニュースは悼ましくてあまりみたくない。
3. 震災が終わったと明確に感じた時期はない。しかし、4年を過ぎると3/11を話題に出したり思いだす頻度は確実に減っていることを感じる

(8) 20代女性

1. 宮城県石巻高等学校で家庭科の授業。
2. 自分の知っている土地で起こっている出来事ということが信じられなかった。
3. まだだとおもう。

(9) 60代女性

1. 宮城県石巻市の自宅のキッチンにいて、揺れている間は壁につかまっていた。
2. 甚大な被害が見て取れ、言葉にならなかった。
3. 未だに街に傷跡が残ったままだし、仮設住宅住まいの方も少なからずいるため、まだ終わっていないと思います。

(10) 60代男性

1. 宮城県東松島市の職場でデスクワークをしていた。地震になったので被害状況を確認してまわり、津波がきたため心配だったが床下浸水で済んだ。
2. 地震から数日後に見ることになったが、想像を絶するというほかない。
3. 荒れ放題のまま放置されている土地がまだまだあり、仮設住宅から抜け出せない方々も多くいる現状です。まだ終わっていないと感じています。

(11) 20代女性

1. 茨城県美浦村の実家で祖母とのんびりしていた。
2. 東北の津波で家が押し流されている映像は、私の地域では被害が少なかったせい、自分たちが体験したあの地震によって引き起こされていることだと思えなかった。
3. ニュースで震災について取り上げられることがなくなった時。

(12) 20代女性

1. 自分の部屋でDVD観てた(埼玉)。
2. 宮城県の津波の映像は思った津波のイメージと全然違うので「何が起きてる？」って感じだった。仙台に住んでる親戚の安否が気になった。気仙沼が火の海になってる映像の方がリアルタイムでは怖いと思った。
3. 輪番停電とか終わって新しい生活がスタートした4月くらいから。

(13) 20代女性

1. 埼玉で市民プールでシンクロの地域交流のレッスンを受けていました。
2. あまりにも悲惨な映像なので辛くてあまり見ませんでした。
3. 祖父母が福島に住んでいるので、まだ震災は終わっていないと感じています。家の周りの森林や川辺や公園の除せんが終わっていないからです。福島が全て元に戻るまで震災は終わっていないと感じています

(14) 20代女性

1. 千葉県の自宅の部屋で翌日の国立後期入試の勉強をしていた。
2. 最初に流れた津波の映像を見た時は大変なことになったと思ったが、翌日のニュースなどで原発事故の話が取りあげられはじめるとこの後どうなるんだろう、と今後の見通しが全く立たなくなった。
3. 2年くらいした頃か、首都圏はあまり影響がなかったので普段からまだ震災が…とは考えることはなくなった。今と同じで原発や被災地のニュースが流れると、まだ終わっていないんだと思う。

(15) 30代女性

1. 埼玉県の職場でお昼休憩を取っていました。
2. 自分の身にも起こっているのに、東北ほど被害が大きくないので、映画の中の世界みたいでリアリティーがありませんでした。でも、不安と恐怖が入り混じる気持ちになりました。
3. 終わったと感じた事はまだないです。

(16) 30代男性

1. 会社で仕事してました（東京都）。
2. 実家大丈夫かなー。
3. 地元の海岸沿いの区画整理が進展しているのを見た時。

(17) 20代女性

1. 東京都市内の自宅で勉強。
2. 大きな地震をなんとかやりすごして安心した直後に見たニュースが最初で、文字通り腰が抜けてへなへなと床に座り込んでしまった。
3. 改めて聞かれると「まだ終わってないなあ」と漠然と思うが、実感を伴って一区切りついたのは、先輩の卒業式が遅れて行われたのを見た時。

(18) 20代女性

1. 東京都内世田谷区。予備校で鍋パーティーしていました。
2. それからワンセグでなにがおきたか追ったとき、とても絶望的な光景で、本当に現実なかわからなくて、とにかく怖かった。
3. 終わったという概念に違和感を覚える。まだ復興できていないし、それにいつ次が、今度は自分の住んでるところで起こるかわからない。終わったなんて思わない。

(19) 20代女性

1. 東京都の某女子校の5階の教室で、吹奏楽の演奏会に向けて部員たちと楽器の練習してました。一応高校3年生？卒業後？だったと思います。ホールで演奏会の予定だったけど結局体育館でやりました。
2. 遠くで起こっていること、という感じでした…。
3. 以来福島を中心に目を向けてきたので、まだ終わってません。

(20) 20代男性

1. 家のこたつで寝転がりながらパソコン開いてた（東京都）。

2. びっくりした。映画の一場面が流れてるのかと思った。
3. 2011年10月ごろ（半年程度）。特に理由はないが、夏休みが終わったら意識しなくなった。

(21) 20代女性

1. 大学生の春休みだったので自分の作品の撮影を早稲田の公園でしてました。
公園のブランコが尋常じゃなく揺れたり枝が折れたりしたのでこいつはでかい地震だと思い、すぐに両親にメールしたので無事に送っていたみたいです。
屋外にいたのでそこまで揺れてたのかな？と思いました。
近隣の幼稚園が全員避難してるのを見て、そんなに？と思いました。
電車が止まっていたので撮影続けるわけにもいかず、当時は中野坂上のアパートに住んでいたのもそのまま歩いて帰って、疲れたのでテレビもつけずにそのまま寝ました（ツイッターで情報をちょっと見てたぐらい）。
2. 新宿で働いていた友達が帰宅難民のため夜うちに来てからテレビをつけて津波の映像を見て地震の大きさを知りました。怖くて不安で夜眠れませんでした。
実家の家族と連絡がとれないので不安でした。海なし県民にとって津波は恐怖すぎる。
3. 4月から大学が始まって普通の生活ができるようになると周りがあんまり震災のことを話さなくなったりと錯覚はありました。
当時はシルクドソレイユでバイトしてたので4月過ぎには公演が再開して、そんなに早い！？と思ったけどお客さんが少なかったりしてたかも。
ただ余震が続くのと原発とかのニュースを見てると終わってないのだなあと思いました。
難しいけど震災に終わりとかないと思う。

(22) 20代男性

1. 電車での移動時、停車駅でドアが開いた瞬間（東京都 京王線明大前駅）。
2. 親戚のことを心配した。
3. 震災を被害を含めて捉えているので、まだ終わったとは思えない。

(23) 20代女性

1. 東京都府中本町の駅、高校へ行こうとしていた。
2. 恐ろしいことが起きたと思った。
3. まだ終わっていない。震災ボランティアは続いているから（カリタスジャパンなど）。

(24) 30代男性

1. 大崎駅の山手線の車内(東京都)

2. 悲しかった
3. 考えたことない

(25) ?

1. 職場(東京都杉並区)でランチ営業を終えて少し仮眠を取ろうとしていた。
2. 冗談でしょ?と思った。正直すぐに現場を理解できなかった。
3. 今年の夏に地元(福島)に帰った時に鰹の刺身を食べた時。ただ正直まだ完全に終わったとは思えてはいない。

(26) 20代女性

1. 神奈川県、平塚市のショッピングセンターで買い物をしていた。
2. 直後は首都圏の様子しか映されていなくて、速報を見て津波で亡くなった人の多さに驚愕し、大変な地震が起きてしまったと感じた。
3. 震災からの買い渋りの動きが収まった一年後くらい。ニュースで取り上げる機会が少なくなったと感じた。

(27) 20代女性

1. 高校の部活中でした。震度4くらいで最初驚いて、揺れがおさまったらなんでもなかったのだと思い、それまでの作業に戻りました(静岡県)。
2. 現実ではない出来事のように感じました。それが実際に起こっているということが受け入れ難かった。
3. いつだろう…ニュースの映像が減るごとに関心を持たなくなったと思う。終わった、と感じたことはなくてなんとなく自分の世界から消えていった。

(28) 20代女性

1. テストが終わった日の放課後に友人とおしゃべりをしていた(静岡県)。
2. 映画を見ているような感じで同じ国で起きていることとは思えなかった。怖かった。
3. まだ続いていると思ってる。すごくニュースなどで取り上げられていたのは震災1年後くらいまでだとは思うけど、まだまだ震災関連の報道などがあるので。

(29) 20代男性

1. 自宅(三重県四日市市)で過ごしており、テレビをつけた際に丁度震災の速報が飛び込んできた。
2. この世のことと思えなかった(暗闇の中で広範囲に燃え広がる炎を見て特にそう感じた)。

3. どの程度の基準を以ってして終わったと言うべきなのかが自身の中で定まってい
ないものの、まだ終わったとは感じていない。

(30) 30代女性

1. 長野県。友人と喫茶店でお茶。
2. 啞然とした。
3. まだ。

(31) 50代男性

1. 広島県広島市安佐南区の自宅におりました。
2. 当時のニュースでは、津波が太平洋側から瀬戸内海にかけてまで、「注意報」が出ていた
ので不安感はつもの一方でした。当然、その後の原発事故も。
3. 「震災」そのものでいえば、3.11の数日後、広島では「影響なかった」で終わりましたが、
関東から東北一帯に目を向けると半年以上は、その余波を感じてました。その後震災から1
年半『土徳流離』の取材が続いたので「被害」は終わっていない思いが今でも続いています。
また、私の自宅付近は一昨年、大規模土砂災害があり、メディア報道が災害の大きなところ
目立ったところだけの「ピンポイント」取材に終始するあり方に大きな違和感を感じまし
た。被害のうすいところがまったく報道されないため、まわりの状況がどうなっているの
かテレビだけではまったく伝わらないもどかしさを感じました。東北の状況もそれ以上
に甚大であったのだろうと改めて思いました。

(32) 20代男性

1. 震災時、韓国京畿都城南市の実家でデスクトップでフェイスブックテトリスをやっ
ておりました。
2. デスクトップ横でテレビもつけていて速報で震災のことを知りました。速報で緊張し
た声でアナウンサーが報道してましたが、速報は大抵自分とあまり関わりのないことを
流すのでなんかやってるんだなって十分くらいテトリスをやっていたらやっと日本のこ
とだとわり、速知人に連絡を取り始めました。自分の知人は東京と大阪にしかいなく連
絡が取り終わったらまたちょっと遠い出来事になる気がして少し戸惑った記憶があり
ます。
3. 知人の無事が確認できた時点だと思います。実際、不謹慎ですが無事を確認できた途
端テトリスをまたやりだしたくらいです。

(33) 20代男性

1. アメリカカリフォルニア。
2. 不安感、親から連絡があった後にニュースを見て想像をはるかに超えていたから。親

戚のほとんどが福島にいるから。

3. 親戚のほとんどが農家でいまだに風評被害の話を聞く。原発の現状を見る限り終わったとは言えない

(34) 20代男性

1. シアトルの夜中近い時間帯だったので友達とチャットしていたら一人が震度7ってことを言うものだから半信半疑リビングに行ってテレビをつけたら速報が流れていて、親を呼び一緒にニュースを見ていた。
2. まだ高校生だったので、津波の映像を見てもどれだけの規模なのか、どれだけの被害が出るのかも把握していないままだ茫然と見ていた
3. この間も塩釜行ってきて、大分市場のほうは活気付いていたけど、海沿いのほうには散乱した墓地や、何もなくなった平地を見かける。元の生活までとは言わないが、普通の生活基準に皆が戻れるまでは震災は続いていると思っている。

以上のアンケートの回答のうち、問 3 で震災が終わった切っ掛けあげたのは 3.4.6.11.12.16.17.20. 25.26.32.の回答者のみで、34名中11名に留まった。しかし、今回回答を依頼した人々のうち、震災による被害がとりわけ甚大だった 3.4.6 の回答者が揃って震災を一区切りついたものとして扱っていることは特筆に値するだろう。3 の回答者による「終わらせたいというか。どうあがいてもこの現実の上で生きていくしかないことに腹をくくりました。」という思いは上記の3名の回答者に共通した気持ちであるように思う。彼らにとって震災は自らの身体、生活、家族、財産、故郷といった多数の重要なフレームの中で起こった事件であり、終わった一事件として扱うことができても、無かったことにはできないものである。むしろ、震災との関係が「日本」というフレーム内のみの事件であった人々にとっては、終わったと感じる切っ掛けもなく、ただの伝聞としてのみその人のうちに存在する、風化を待つだけの記憶となっているように私には思われる。終わった事件として処理しないのは、その風化に抗うためのせめてもの抵抗なのではないだろうか、このアンケートの回答を見て思った。

東日本大震災はこの先、いつかは記憶ですらない、ただの記録になってしまうだろう。だからこそ、ドキュメンタリー作品等の記憶の記録の重要性を痛感する結果となった。

しかし、その記憶を留め、伝えるものであるからこそ、ドキュメンタリーに記録以上の意味(たとえばプロパガンダ的意味合い)を含ませてしまうことは危険であるし、必要以上のフィクション性が盛り込まれることを良しとはできない。

この問題について、青原さとし監督に意見を伺った。以下、その全文である。

Q. 私は先の震災で被災し、ドキュメンタリー映像のレンズを向けられる側の立場を初めて経験しました。

完成したものをしていると、(自分や家族友人が直面していた問題の多くが制作側の選択にもれて取り沙汰されない鬱積がそう感じさせたのだと思いますが)それが制作側の意図に沿う事実だけをつぎはぎして作られたフィクションになってしまっているように感じたことをよく覚えています。

ドキュメンタリーには制作者がいて情報の選択・編集が為される以上、多少のフィクション性や物語性が生まれてしまうことは仕方ないことだと思います。

監督はドキュメンタリー作品を構成する上で、意図的にある程度のプロットを設定することについてはどうお考えでしょうか。

監督の作品に意図や主題よりも前に「記録すること」への真摯さを感じたのでぜひお尋ねしたいです。

A. ありがとうございます。とても素晴らしいご指摘です。

菊池さんのようなお立場とご経験をされている方からそう言っていただき光栄です。

私は、旅した時に出合った人やそれまで知り合いや友人から話を受けて初めて「撮りたい」あるいは「撮らねば」と思ったことを題材にしているだけなのと、そう思った以降もあまり予備知識を入れずにすべて白紙にして現地の人に接し、知っていることまでをも、聞き取りの題材にするよう心がけています。

それはテレビ局などに身をおいた経験を経ず民映研という場で姫田忠義師の方法論を踏襲しているにすぎないのかもしれませんが。

こういう業界にいると当然、一部のテレビ局の方法論をよく見聞します。テレビには特に「構成案」や「シナリオ」という方法が大きな前提になって動いているので、取材方法も焦点化され絞り込まれ身動きとれない世界なんだなといつも痛感してます。逆にそれが取材対象との温度差が如実に表れる場合が多々あります。

あと「フィクション」や「物語性」ですが、まず映像自体が現実や世界を「フレーム」によって縁取られ選ばれた世界であるのと、その選択を積み重ねる＝変化させるもしくは変化することが「編集」でありそれが編み上げられたものが「物語」なのだと思います。つまり映像とは「対象」の変化の一過程および一部分だといえるでしょう。

また私は可能な限り取材対象になる方に喜んでいただけるようなものを極力題材にしたく思っています。

それはやはり人々が誇りをもって継承してきた「基層文化」や「民俗文化」だと思っています。「土徳流離」は「真宗移民文化」の「過去と現在」を撮ることが目標でした。

青原監督の作品では被写体となる人々が自然な表情で、どこか嬉しげに映っているように見えた。恐らくは青原監督が撮影側・視聴者側のニーズではなく、被写体側のニーズに応じていく姿勢を取られていることが大きなその要因であることが、この回答から伺い知れた。私は今回、ドキュメンタリーを編む過程で生まれがちなフィクション性やプロパガンダ性を極力排除するためにできるだけ情報に手を加えないことを目標としたが、どうしても情報が解りづらいため、回答順を土地順にせざるを得ず、回答も私が設定した 3 つの質問というフレームが功を奏したケースもあったし、むしろ枷となったケースもあったように思う。3 つ目の質問が最も私の意図が出た質問であったが、その意図が回答者側の立場に寄り沿っていたものではなかったように思う。しかし、震災を見つめる際のフレームを被災した地域、人々のみではなく、日本全体へと広げてみることで、自分のなかで新たな震災の捉え方が生まれたことも事実である。震災が「日本」に何をもたらしたのか、震災とは何だったのか、という問いへの答えには辿りつけなかったが、ドキュメンタリー作成において削ぎ落とされがちな小さな声の記録という目標は、ある程度果たせたのではないかと思う。